付篇4

館蔵品調査報告
－平生町宮原古墳出土遺物－

横山　成己

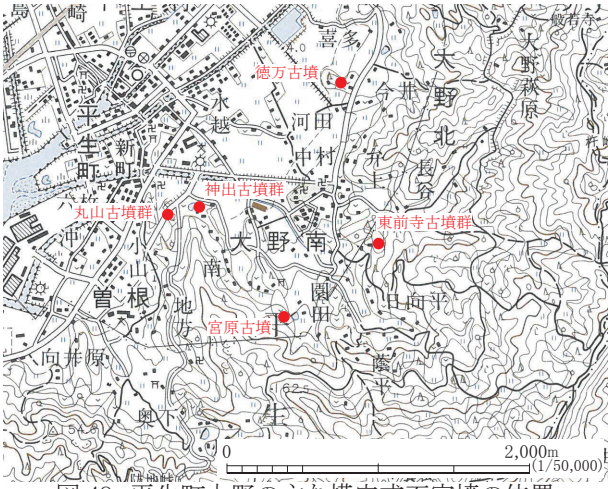

図 48　平生町大野の主な横穴式石室墳の位置
国土地理院発行5万分の1地図「柳井」を用いて作成

写真 82　宮原古墳推定地遠景（東から）
令和5年5月3日撮影

写真 83　宮原古墳推定地近景（北東から）
令和5年5月3日撮影

1. 資料の由来

山口大学埋蔵文化財資料館には、当館設立以前に、県内各地にて本学教員および学生により採取された考古資料が多数収蔵されている。その多くは、本学教育学部で教鞭を執っていた小野忠熙氏と、氏の指導した地理学談話会および文化会考古学部に所属した学生により採取されたものとみられる。資料情報として採取年月日の残るものは限られるが、採取時期としては小野氏が教育学部光分校着任してまもなくの昭和25年(1950)以降から、本学の吉田地区（山口市）統合移転直前の昭和30年代末頃までに集中するようである。

これらの資料群のうち、本稿にて紹介するのは、ほぼ完形の須恵器坏蓋1点である。当館の資料収蔵状況としては、遺物コンテナ番号18、遺物収納袋番号4に該当する。蓋天井部外面に「大野　宮原古墳　寄贈」の注記が見られることから、大野村（昭和30年（1955）に平生町と合併）の宮原古墳から出土した資料を、所有者より譲り受けたとみられる。当館には同時に採取したと想像される土師器小片1点（遺物コンテナ番号2、遺物収納袋番号1）も存在するが、両者ともに採取年月日は残されていない。

なお、当資料については、令和3年（2021）11月3日（水・祝）の山口県立山口博物館との連携事業（平生町教育委員会共催）、講座「古代ウォーク（平生町）」配付資料に実測図を掲載している。

2. 宮原古墳について（図48、写真82・83）

宮原古墳は、室津半島の北西部、大星山から北西に大きく派生する丘陵の山腹（標高約70m）、平生町大野南に位置している。周辺には北東約800mに10基からなる東前寺古墳群が、北西約900mに神出古墳群[註2]が位置しており、半島内でも古墳

時代後期から飛鳥時代にかけての古墳が密に分布する地域である。

古墳の文献上の初出は、弘津史文氏による報告である（弘津1927）。報告では、大野村大字南村小字宮原第648番地山林にて大正3年（1914）5月25日に発見されており、無袖式の横穴式石室（全長9尺、幅7尺、高さ6尺）内から坏8点、提瓶3点、坩1点、つまみ付き蓋1点、高坏2点が出土したとされる。

一方、『平生町史』（本村1978）によると、宮原古墳は大正6年（1917）頃偶然発見された無袖式の横穴式石室墳（現存長2.45m、幅2.1m）で、奥壁と両側壁の基底石が遺存しており、遺物は羨門部付近から出土したとされる。須恵器には坏蓋1点、坏2点、蓋3点、坩2点、高坏3点、提瓶1点、脚付長頸壺1点、甕1点が存在し、うち高坏1点は東京国立博物館に収蔵され[註3]、他は地元の個人所蔵となっている[註4]。ここでは、藤田等氏により公開された遺物実測図を転載しておく（図49）。

両者とも無袖式横穴式石室墳で石室幅も共通していることから、元来同一墳であり、石室長・高の縮小は破壊が進行したためと推定することも可能であるが、発見年が異なっていること、出土遺物に相違が認められることから、別墳である可能性も残す。遺跡地の現状確認とともに今後の検討が必要であろう。

当館所蔵品は、出土遺物の所蔵者から直接寄贈を受けたと推測されるため、古代ウォーク下見時（令和3年（2021）6月1日実施）に所蔵者宅を訪問したものの、すでに居住されていないとのことで、知人に庭や畑地の管理を委ねている状況であったことから、出土資料（図49）を実見することができず、石室の存否を含め詳しい情報を得るに至らなかった。

3．山口大学埋蔵文化財資料館所蔵の宮原古墳出土須恵器（図50、写真84、表25）

MHK1は口縁の一部を欠失するが、ほぼ完形の須恵器坏蓋である。口径13.4㎝、器高3.75㎝を測る。扁平な天井部から内湾して口縁に至り、口縁端部は丸く収める。器面調整は外面上位1/6に回転ヘラ削りが、以下は回転ナデが施されれ、天井部中央に直線的なナデが施される。内面は回転ナデが施され、中央に直線的なナデが施されている。焼成は堅緻で、色調は内外面とも灰色を呈している。胎土は緻密で、長石のほか金雲母が含まれている。

これまでに知られている出土遺物（図49）から、宮原古墳の初葬は古墳時代後期中頃、追葬は古墳時代後期後半と推定されており（藤田1966）、当資料は追葬時の供献土器とみられる。

4．小結

室津半島基部の平野部は現在、柳井市、田布施町、平生町の市街地が広がるが、閉塞時期が不明ながらも古代のある時期までは、古柳井水道が貫通していたと推定されている。古墳時代後期まで上記の環境下にあったならば、古墳の所在する大野南は、百済部－戎ヶ下海峡から北東に古柳井水道に侵入してまもなくの室津（島）北西内湾部（これを大野湾と仮称する）に当たる。大野湾から水道を北西に約6㎞直進すると、古墳時代前期から後期にかけて首長墓が展開する田布施川河口域（田布施町川西や宿井）に至る。大野湾が海交通上要衝の地であったことは容易に想像が付き、宮原古墳は東前寺古墳群とともに、その奥津城と言える場所に立地していることからも、今後当地の再評価が必要であろう。

【註】

1）藤田等ほか（1966）『東前寺古墳群発掘調査報告』平生町文化財資料Ⅰ，平生町教育委員会，平生（山口）

2）神出古墳群については、現在までに5基が確認されており、弘津氏による大正2年と10年の調査が指摘されている（平生町教育委員会による現地の遺跡看板）が、弘津氏による大正2年（1913）2月の調査地は「大野村字南小字丸山（円墳・箱式石棺）」、大正10年3月15日の調査地は「大野村字南小字大久保4番第7・8番地（円墳・横穴式石室か）」となっており（弘津1927）、西に

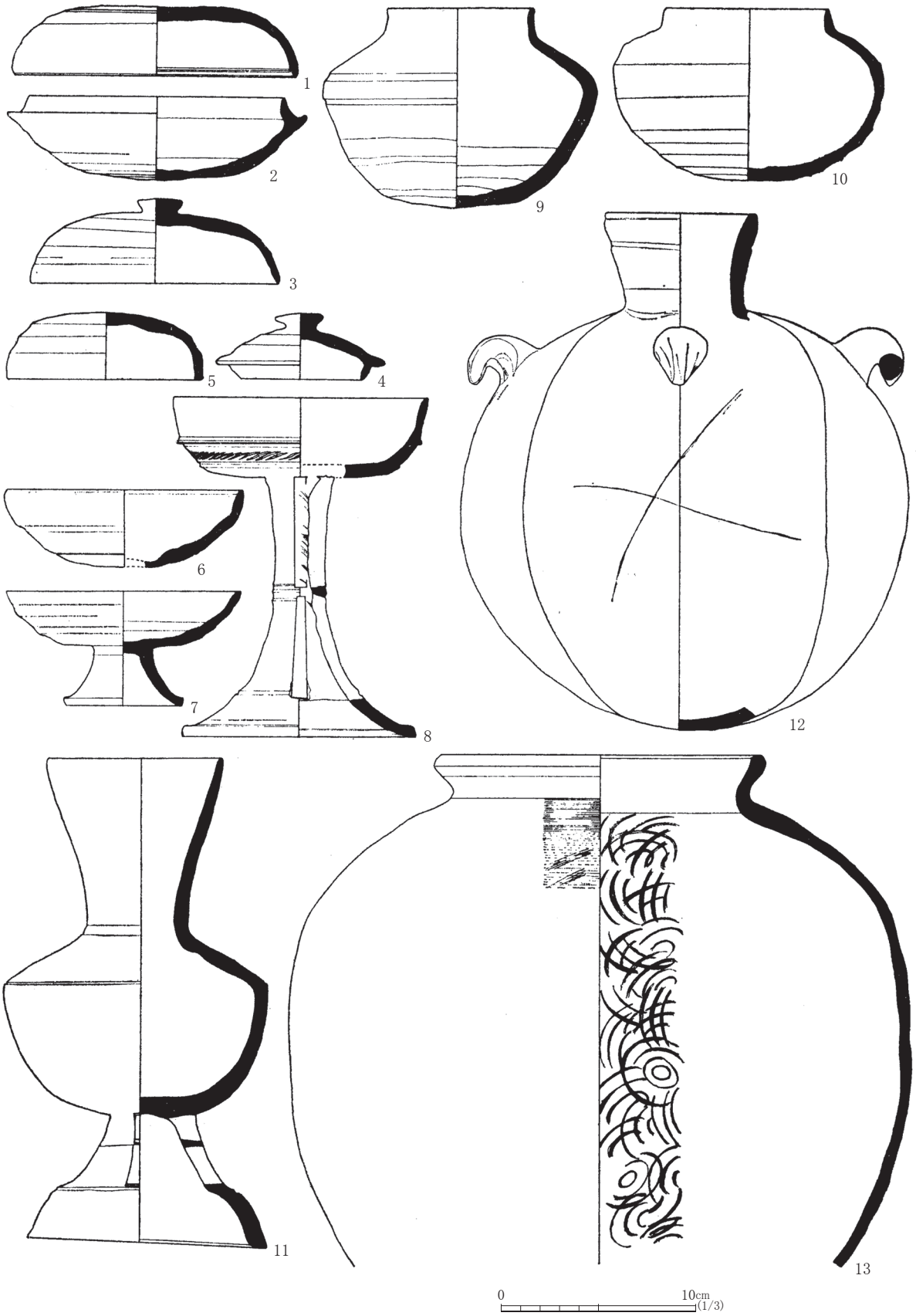

図 49　宮原古墳出土遺物
『東前寺古墳群発掘調査報告』平生町教育委員会 1966 より転載・一部修正

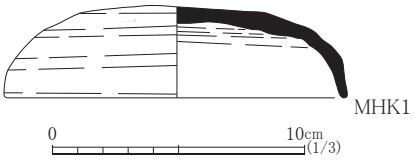

図 50　宮原古墳出土遺物（当館所蔵）

写真 84　宮原古墳出土遺物（当館所蔵）

表25　出土遺物（土器）観察表

法量（　）は復元値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量（cm）①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	備考
1	宮原古墳	須恵器 坏蓋	ほぼ完形	①13.4　③3.75	①②灰色(N6/～5/)	密（0.1～4㎜φの砂粒（金雲母・長石など）少量混ざる	

近接する丸山古墳群と混同している可能性がある。なお、昭和63年4月4日に4号墳から出土した須恵器蓋坏と提瓶は平生町歴史民俗資料館に収蔵されている。

3）国立文化財機構所蔵品統合検索システム　https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/J-8615?locale=ja
詳細情報抜粋　［出土地］山口県平生町　宮原古墳　［寄贈者］奥本嘉男氏・奥本鶴松氏寄贈　［所蔵者］東京国立博物館
［機関管理番号］J－8615

4）宮原古墳については、昭和40年（1965）に平生町大野南にて実施された東前寺山古墳群の発掘調査時に、藤田等氏により現地調査と出土資料調査が実施されている。報告書に提示された遺物実測図（本稿図49）のうち、3・4・5・10・11・12の6点は個人蔵で、他は藤田氏が石室左側壁前端部で採取したとされる（藤田1966）が、藤田氏採取資料1・2・6・7・8・9・13の7点の所在は確認できていない。

【文献】

弘津史文（1927）『周防国熊毛郡上代遺跡遺物発見地調査報告書』，弘津史文（編），山高郷土史研究会発行，山口

藤田等（1966）「Ⅰ　古墳群の位置・環境」，藤田等（編）『東前寺古墳群発掘調査報告』平生町文化財資料Ⅰ，平生（山口）

本村豪章（1978）「第一編平生地方の古代・中世　第一章平生地方の原始・古代　第三節古墳時代」，平生町史編纂委員会（編）『平生町史』，平生（山口）